

弥生時代の高地性集落

えげのやまいせき

国指定史跡

会下山遺跡



芦屋市教育委員会

国指定史跡 えげのやま 会下山遺跡

会下山遺跡は、兵庫県芦屋市三条町にある国指定史跡で、弥生時代（今から約2000年前）の高地性集落跡です。高地性集落とは、水田を営むには不便な山の上にあった集落のことです。

会下山遺跡は、昭和29年（1954）に、会下山の麓にある市立山手中学校の生徒たちが植物実習園をつくるために山道を切り開いていたところ、出土した弥生土器の破片に気づき、発見されました。

この発見を受けて、昭和31～36年（1956～1961）には、芦屋市教育委員会が発掘調査を実施し、竪穴住居跡や祭場跡など、さまざまな生活の痕跡が見つかりました。

発掘調査の結果、会下山遺跡は、山の頂から山裾まで、山全体に広がる大規模な集落跡であることがわかりました。そして、弥生時代中期後半から後期前半（紀元前2世紀～紀元1世紀）の間、300年近くにわたって長期間営まれていた集落であったことも明らかとなりました。

また、この遺跡からは、当時、大変貴重であった鉄器が多数出土しており、中国大陸で作られた青銅製漢式三翼鏃が採集されていることから、積極的に交易を行っていたことがわかります。

現在、遺跡は歴史教材園として整備され、子どもたちの学習の場として、また、市民やハイカーの憩いの場としても親しまれています。



南東方向から見た会下山遺跡（赤色の楕円で囲んだ尾根）

発掘回顧 えげのやま

今から60年以上も前、わたしの青春時代は会下山でした。こんな山の上に弥生人が果たして住んでいたのだろうか。その疑問は、数年間の発掘で次々と住まいの跡が見つかり、解消しました。尾根筋の高みには大きな家があり、柵で区画され、さまざまな物を持っていました。当時は村長の家だと考えることにしました。その裏、少し高いところには、仮小屋とケルンのような石組がありました。祭場が付設されたのでしょうか。さらに上の方にも貝殻がいっぱい出てくる祭場を見つけました。ここはその後、共食用の高杯が豊富に出ていることが指摘されており、住人たちにとって特別な場であったことが補強されています。

集落の一画には屋外調理場を設け、ことあるときには、のろしをあげたようです。尾根の上には手ごろな湿地があり、泉が湧いていました。ただし、井戸などは見あたりません。数分すれば、山麓の高座川にたどりつき、川の水にはありつけたことでしょう。集落のはずれには墓地をこしらえたい。副えられた土器の中にガラス小玉が1点ありました。

弥生山城の首長の家は大阪府東山遺跡に、のろし場は奈良県上ノ山遺跡に、水場は岡山県貝殻山遺跡や大阪府古曾部・芝谷遺跡に、祭場は兵庫県大盛山遺跡や島根県田和山遺跡などにそれぞれ認められます。会下山遺跡ではそれらがことごとくそろい、仮小屋と石組の祭場は、日本列島のどこをさがしても例がありません。さらに景色の良い山頂のムラの祭場も例が少ないものです。当時、石組を南西諸島、沖縄のウタキの習俗と関連づけて、発掘調査後の報告書を書きましたが、果たして、夢か幻か。この遺跡をとくにご覧いただいて、みなさんもいっしょにお考えください。

兵庫県立考古博物館名誉館長
会下山遺跡・城山遺跡調査委員会委員長
石野博信



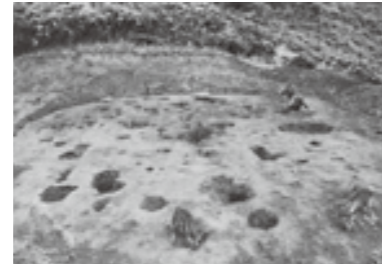
発掘調査中の会下山遺跡（昭和30年代）
芦屋市内で初めての発掘調査で、大学生に混じって市立山手中学校歴史研究部の生徒も参加しました。



会下山遺跡を発掘する調査員と中学生
炎天下、祖先の足跡を求めて山の頂で黙々と発掘を続けました。上半身裸でがんばっているのは、大学院生の私です。



柵でまるく囲まれているのは、発掘された竪穴住居跡です。(7ページ参照)



発掘された最も大きな竪穴住居跡で、面積は約60㎡です。村全体で共同に使った集会所？それとも工房？村長が住んでいたのかも！？(7ページ参照)



祭りに関わる石組や小屋が見つっています。男性器を模した石製品やガラス小玉が出土しました。(8ページ参照)



季節によってはイノシシも顔をだしますよ。急な坂道も多くありますので、足もとにご注意を！

会下山遺跡の北端には二重の堀跡が見つっています。
※遺跡はここまでです。(9ページ参照)

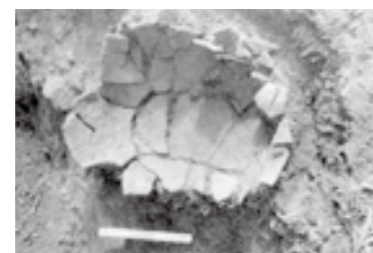
火たき場跡。共同調理場？ノロシをあげた跡？火をあつかうため、風向きも考えられています。(8ページ参照)



ここは見晴らしが最高！遺跡の中で最も高い場所です。標高は約200m。弥生時代には祭場でした。(6・8ページ参照)



発掘された竪穴住居跡の触覚模型があります。
※遺跡はここまでです。



乳幼児の墓が4基見つっています。(9ページ参照)



高床倉庫が復元されています。「茅葺き屋根」「ねずみ返し」など、当時の人びとの工夫を観察してみましょう。

ようこそ、会下山遺跡へ！

2000年前、会下山遺跡では、いったいどんな生活が営まれていたのでしょうか。生活のようすを考えながら、遺跡を歩いてみましょう。自然にとけこみ、自然を利用し、自然に守られ、自然とともに生きる。会下山遺跡の人びとは、山の自然と共存して暮らしていました。

※地図内の赤色や水色、灰色の長方形は発掘調査区で、現在は埋め戻されています。
※青字のアルファベットは、発掘調査時の地区名を意味しています。

発掘された会下山遺跡

会下山遺跡からの眺望

会下山は六甲山から南へのびる尾根で、山頂の標高は201.2 mです。東側の山裾には、芦屋川の支流である高座川が流れています。西側の山裾には「しのき谷」と呼ばれる谷があって、神戸市との市境となっています。

山裾までは開発が進み市街地が迫っていますが、南側の山裾にある会下山遺跡の入り口から山に入ると、緑豊かな自然が広がっています。遺跡には、入り口から登山道を8分ほど歩くと到着します（裏表紙を参照）。

高地性集落の特徴のひとつは、見晴らしが良いことです。会下山遺跡の山頂にあるS地区祭場跡からの眺めは、大変すばらしいものです。その景色は、南に大阪湾が見え、東の大阪平野には市街地が広がり、その奥に横たわる生駒山地、二上山、葛城・金剛山地を見わたすことができます。さらに、天候に恵まれた日には、遠くの和泉地域や紀伊山地まで見ることができます。また、南西の方角には、神戸市域の住吉川付近や六甲アイランド付近まで見ることができます。



会下山遺跡の最高点（S地区）からの眺め（南東方向を望む）

発掘された集落跡

会下山遺跡では、^{たてあなじゅうきょあと まつりば} 竪穴住居跡や祭場跡、^{あつひ} 火たき場跡、^{ぼあと} 堀跡、^{ほりあと} 墓跡などが発掘されています。

これらの中で、竪穴住居跡5棟は、埋め戻さずに、芝を貼って、現地で見学できるようになっています。

会下山遺跡の住居

会下山遺跡では、竪穴住居跡が9棟見つかっています。これらの竪穴住居跡は、平面が円形や楕円形で、大きさは直径が5 mほどのものから9 m前後のものまであります。竪穴住居1棟には、5人前後が住んでいたと考えられます。

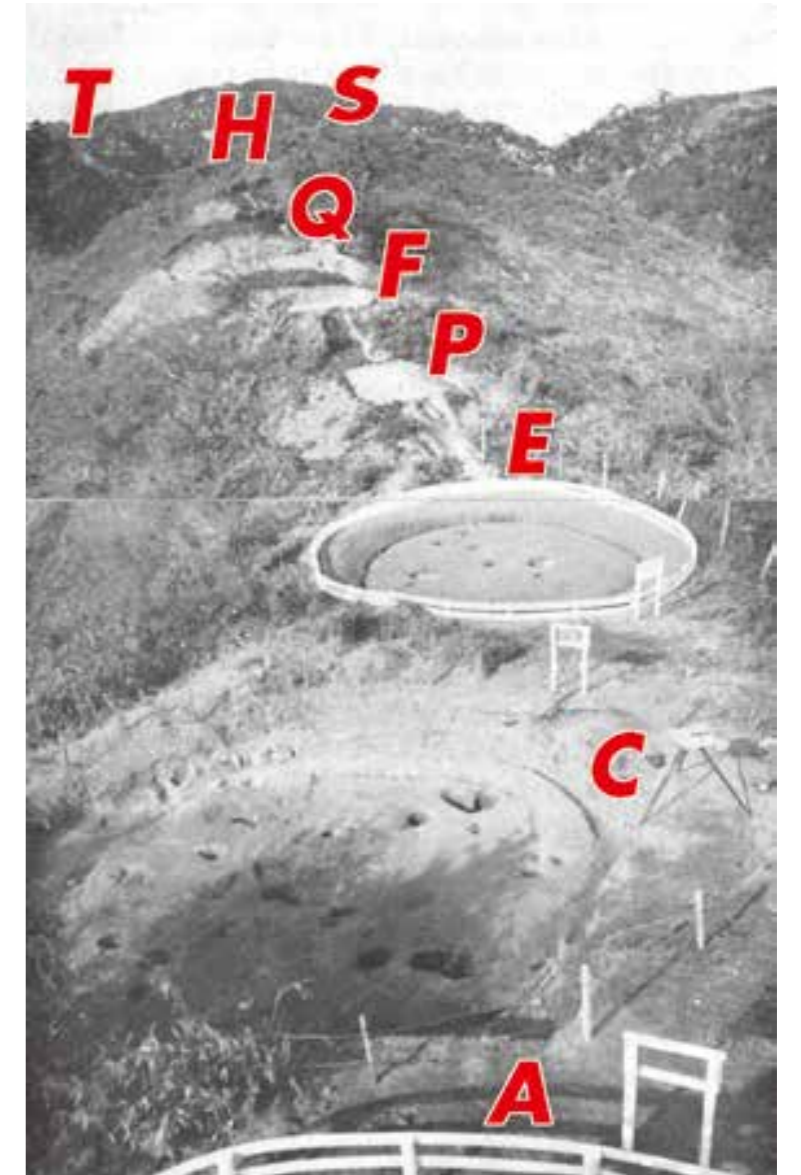
竪穴住居は、地面を数十cm掘り下げて、平らな床面をつくり、その上に茅葺きの屋根を伏せたような構造となっています（15 ページ「復元竪穴住居」参照）。

発掘された竪穴住居跡には、^{はしらあな} 柱穴や、調理や照明、暖房のために火を用いた炉の跡などが見つかっています。

興味深いものに、他の竪穴住居跡より高い場所で見つかったF地区住居跡があります。直径が8.2～9.8 m、面積が約60 m²もあり、遺跡内で最大の竪穴住居跡です。そして、当時、大変貴重であった鉄器や、ガラス小玉などが集中して出土しました。



発掘されたC地区竪穴住居跡



尾根上に連なって見つかった集落跡（昭和30年代）
（アルファベットは地区名を示す）

このように、F地区住居跡は、会下山遺跡の中で最も大きく、最も高い場所にあつて、貴重なものがまとまって出土していることから、村長のような身分の高い人の家であったのではないかと考えられています。あるいは、住居ではなく、集会所や共同作業所のような集落全体で管理されていた施設であったのかもしれない。

まつりば 村の祭場

会下山遺跡では、まつりばあと祭場跡が2ヶ所で見つかっています。

その一つが、F地区住居跡の北側にあるQ地区の祭場跡です。ここからは、石組や小さな建物跡などが見つかりました。また、男性器を模した石製品やガラス小玉など、珍しい遺物が出土しています。

もう一つは、会下山遺跡の最高点付近（標高約200m）にあるS地区の祭場跡です。この場所は眺望が大変良く、眼下に広がる平野や、大阪湾を越えて和泉地域や紀伊山地まで望むことができます。この地区からは、平面が円形で、東西約6.4m、南北約6.0mの大きさの穴が見つかっています。この穴からは、二枚貝（サルボウ貝）の貝殻が20個出土しています。また、食べ物を盛る高杯と呼ばれる土器がたくさん出土しています。これらのことから、祭場では人びとが見晴らしの良い場所に集い、盛大な祭りが行われたと考えられます。



Q地区祭場跡の石組

ひ 火たき場とその役割

会下山遺跡では、火をたいたことによって土が真っ赤に焼け、表面に真っ黒な炭が付いている穴が見つかっています。このような火たき場の跡は、N地区など、2ヶ所で見つかっています。

これらの場所では、何のために火をたいたのでしょうか。その理由としては、調理をするため



発掘された火たき場跡の一部

の施設や、他の村に危険を知らせるためにノロシをあげたなど、いろいろな説があります。どの説が正しいのか、まだわかっていません。これらの説とは別に、金属器やガラス製品を作ったり、土器作りで土器を焼くための火だったのかもしれない。

火たき場の役割については、まだまだ謎ばかりです。

ほり 集落の北端にあった堀

会下山遺跡の北端には、二重の堀跡がありました。これらの堀跡の規模は、外側のものが幅約5.5m、深さ1m以上、内側のものが幅約3~4m、深さ約1.2mあります。なお、これらの堀がどのように巡っているのかは、まだ確認できていません。

これらの堀は、争いの敵の攻撃や、イノシシなどの動物の侵入を防ぐ役割があったと考えられます。または、S地区のまつりばを日常の空間から区別するための結界の役割を果たしていたのかもしれない。



遺跡の北端で発掘された堀跡の一部

会下山遺跡の墓



M地区では、乳幼児を埋葬した墓跡と考えられる穴が4基見つかっています。これらの穴の中には、土器が据えられたものや、ガラス小玉が出土したのがあります。

ところで、会下山遺跡では、大人の墓は見つかっておらず、どのように埋葬していたのかはわかっていません。

M地区で見つかった乳幼児の墓跡

会下山遺跡の植物

遺跡の土の中には、当時、その場所や周辺に生えていた植物の花粉や胞子などが保存されることがあります。

会下山遺跡の土を調べたところ、たくさんの花粉や胞子が見つかりました。その結果、今から約2000年前の会下山遺跡に生えていた木々は、松が中心であったことがわかりました。

さらに、会下山遺跡の土の中からは、野生にはないはずの稲や蕎麦の花粉も見つかりました。これらの花粉から、会下山遺跡では、米や蕎麦の実の料理が食べられていたようです。ただし、稲や蕎麦の花粉は、稲粃や稲藁、蕎麦殻などにくっついて、平野の集落から持ち運ばれてきた可能性もあるので、これらの花粉が出土したからといって、稲や蕎麦が会下山遺跡で栽培されていたと断定することはできません。

このように、遺跡の土に含まれる花粉などを調べることによって、当時の自然環境や、食生活、生業などを復元することができます。



土の中から見つかった蕎麦の花粉
(会下山遺跡・城山遺跡調査委員会委員
松下まり子氏撮影・提供)

会下山遺跡の出土品

会下山遺跡からは、当時のさまざまな道具が出土しています。出土品には、土器や石器、青銅器、鉄器などがあります。なお、当時は、木の道具（木器）もあったはずですが、2000年の長い間に、朽ちてしまって残っていません。

土器

日常的に使われていた土器には、壺・甕・鉢・高杯・器台などの種類があります。土器の形や、粘土に含まれる砂粒、表面を飾る文様などを詳しく調べると、その土器がいつ、どこの地域で作られたものかを明らかにすることができます。

会下山遺跡から出土した土器を調べた結果、近江（滋賀県）、河内（大阪府）、讃岐（香川県）など、遠くのさまざまな地域から持ち運ばれてきた土器が含まれていることが明らかになりました。これらの土器からは、会下山遺跡がいろいろな地域と活発に交流していたことがわかります。



出土した土器

石器

石器には、斧や錘、砥石など、さまざまな種類があり、矢尻や投弾などの武器もあります。

石を打ち欠いて作られた石器（打製石器）は、大阪府と奈良県の境にある二上山で採れるサヌカイトという石材で作られています。なお、磨いて作られた石器は、磨製石器といいます。

また、火山の噴火で生じた軽石が遺跡内に持ち込まれていますが、これらは木器を作る時に、紙ヤスリのように仕上げの道具として使用されていたと考えられています。



さまざまな石器

青銅器・鉄器

会下山遺跡が栄えていた弥生時代の中期から後期にかけては、ちょうど近畿地方で石器から鉄器へと移り変わる時代でした。

会下山遺跡では、青銅製漢式三翼鏃が採集されています。これは、中国大陸で戦国時代（紀元前403年～紀元前221年）の後期以降、秦（紀元前221年～紀元前202年）・前漢（紀元前202年～紀元8年）の時代に生産された青銅製の矢尻です。弩機という武器の矢先に装着されていました。

当時、大変貴重であった鉄器も多く出土しています。矢尻、斧、ノミ、ヤリガンナなどのほか、釣り針状のものも出土しています。



青銅製漢式三翼鏃
(現存長 4.4 cm, 芦屋市指定文化財)



中国大陸の武器（弩機）



さまざまな鉄器

ガラス製品

ガラス製品は、当時、装飾品として重宝されていました。会下山遺跡では、直径1～4mmほどのガラス小玉がいくつか出土しています。



ガラス小玉



高地性集落の役割

弥生時代には、大きな集落と小さな集落、平野にある集落と山や丘にある集落など、さまざまな集落がありました。

これらの中で、近畿地方では、数百人が住む大規模な集落に地域のリーダーがいました。そして、そのリーダーが共同の労働を指揮し、他地域のリーダーともつき合っ、さまざまな品物や情報を手に入れていました。大規模集落では、石器や木器の製作はもちろんのこと、銅鐸や銅剣などの青銅器も生産していました。

これら大規模の集落で生産された特産品は、遠い地域まで流通していました。近畿地方では、北部九州や中国大陸、朝鮮半島で作られた品物が出土していることから、弥生時代には長距離の交易が行われていたことがわかります。

一方、高地性集落は、見晴らしが良く、人や物の動きを見張るには絶好の場所です。高地性集落では、ノロシをあげることによって、重要な情報を周辺の村や人びとに伝えていたのかもしれませんが。会下山遺跡は、このような監視と情報の発信・伝達の役割を果たすことで、青銅製漢式三翼鏃や鉄器、ガラス小玉のような貴重な品々を、見返り品として平野の集落から入手していたのかもしれません。



全国各地の高地性集落

全国で発掘された高地性集落を見ると、そこに住む人びとは山の中に閉じこもって自給自足の生活をしていただけではなく、他の村と盛んに交流していたようです。鏡や鉄器をはじめ、当時の最も先進的な品物をいち早く入手し、朱など希少な顔料の生産活動にも関心を向けています。会下山遺跡から見つかった青銅製漢式三翼鏃は、中国大陸からもたらされたものです。

現在、約700ヶ所の高地性遺跡が見つっています。これらのうち会下山遺跡のように、住居跡が見つっている高地性集落跡は200ヶ所ぐらいで、集落の構造がわかっているものは数十ヶ所を数えるにすぎません。中心となる時期は全国一律ではなく、大きく分けると、弥生時代中期後半（紀元前



主な高地性集落跡の分布（田中琢『倭人争乱』集英社 1991 年刊から）

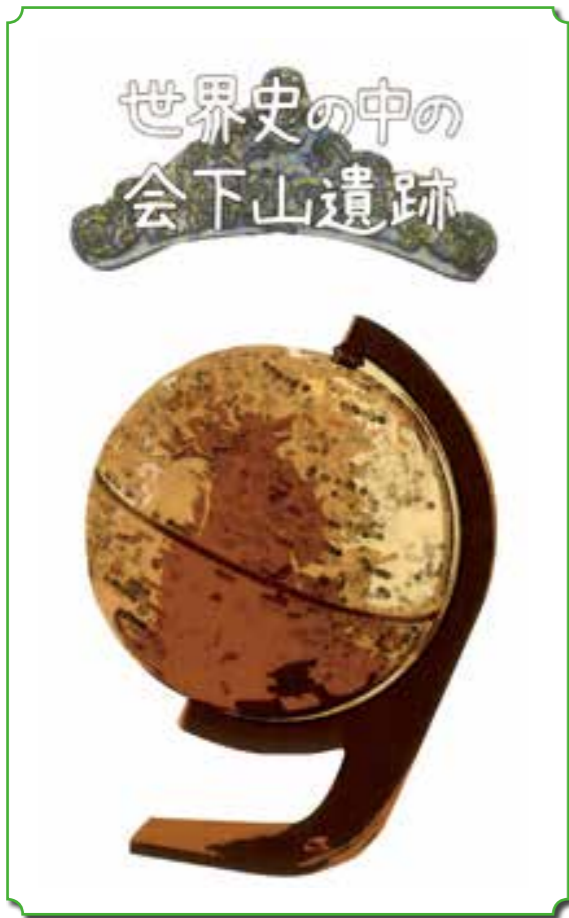
西日本の主な高地性集落の分布を示した図です。会下山遺跡も高地性集落を代表する遺跡として取り上げられています。

1～2世紀）、後期前半（紀元1世紀）、後期後半（紀元2世紀）、古墳時代前期初頭（紀元3世紀初頭）のそれぞれにピークをもつ地域があります。高地性集落の役割や性格については、見張り場、逃げ城、公会・交易、大規模集住、畑作農耕、交通拠点、祭場など、さまざまな説があります。

瀬戸内海一円では、弥生時代中期後半（紀元前1～2世紀）に盛んに営まれ、漁撈・製塩・貝採集などの活動が盛んな集落もたくさん見つかっています。表六甲・生駒西麓・淀川右岸・大和・和泉・紀伊北部・山城南部などでは後期前半（紀元1世紀）にピークがあり、淀川左岸・木津川流域・山陰や北陸では後期後半（紀元2世紀）のものが増加し、北限の越後では古墳時代前期初頭（紀元3世紀初頭）まで下るものが認められます。こうした分布状況には、社会における緊張関係が時間的に推移し、地理的に移動していくように見えます。高地性集落と入れ替わるように古墳が築造される地域もあって、社会の変化を考えると興味が尽きません。

会下山遺跡は、弥生時代中期後半から後期前半（紀元前2世紀～紀元1世紀）まで継続しており、見張り場、逃げ城、公会・交易、大規模集住、交通拠点、祭場など、さまざまな性格や役割をあわせ持っていたのではないかと考えることができます。





会下山遺跡は今から 2000 年ほど前の遺跡ですが、この頃、世界では一体どのようなことが起こっていたのでしょうか。

弥生時代中期の後半、この山の上で集落の開発が始まった紀元前 2 世紀頃、中国では前漢帝国が最盛期を迎え、7 代皇帝の武帝が登場し、紀元前 129 年に北方の匈奴を討伐します。ローマでは、マケドニア戦争やポエニ戦争が起こっています。エジプトでは、プトレマイオス朝エジプト王国がアレクサンドリアに都し、紀元前 196 年にはヒエログリフ・デモティック・ギリシア文字が併刻された法令ロゼッタ・ストーンが誕生しています。インドでは紀元前 180 年にマウリア朝が崩壊。紀元 1 世紀には、アジャンター石窟寺院が開かれています。

会下山遺跡が消滅する弥生時代後期中頃（紀元 1 世紀頃）は、ローマ帝国で五賢帝時代が始まる頃（紀元 96 年）に当たります。ベスビオ火山の噴火でイタリアの町、ポンペイが滅びたのは紀元 79 年です。翌

年にコロッセウムが完成したこともよく知られています。

『魏志』倭人伝や『後漢書』東夷伝などの中国の歴史書には、紀元 2 世紀後半頃に日本列島で起こった倭国大乱の記載が見えますが、これは紀元 1 世紀頃の会下山遺跡の消滅より後の出来事だといことがわかります。つまり、会下山遺跡と倭国大乱は、直接には関係ないといことができます。

こうして世界の歴史を見わたすと、有名な人物が次々と会下山遺跡の営まれた時代に登場しています。『ガリア戦記』を表したカエサル（紀元前 100 年～紀元前 44 年）、絶世の美女といわれたクレオパトラ（紀元前 69 年～紀元前 30 年）、中国初の通史『史記』を記した司馬遷（紀元前 145 年～没年不明）、最大版図をめざしたローマのトラヤヌス皇帝（紀元 53 年～117 年）等々。

当時の日本は倭と呼ばれ、北部九州にあった奴国の王が紀元 57 年に後漢の洛陽に使者を送り、光武帝より「漢委奴国王」と刻まれた金印を授かっています。

このような時代に、会下山遺跡で人々は暮らしていたのです。



会下山遺跡の主なできごと

- 昭和13年 阪神大水害によって会下山で土砂が流出し、弥生土器が多数出土
- 昭和29年 市立山手中学校が、会下山に植物実習園をつくるために生徒たちが山道を切り開いていたところ、弥生土器の破片を発見（2月23日）
- 昭和31年 第1次調査を実施（3月21日から1週間）
- 昭和33年 第2次調査を実施（7月29日から15日間）
- 昭和34年 第3次調査を実施（8月4日～8月25日）
第4次調査①を実施（12月17日～12月29日）
- 昭和35年 兵庫県史跡第1号に指定される（5月12日）
第4次調査②を実施（8月15日～8月31日）
- 昭和36年 第5次調査を実施（7月20日～8月5日）
芦屋市が遺跡保存工事に着手し、竪穴住居と高床倉庫を復元し、歴史教材園として整備。
- 昭和38年 市民会館内に郷土資料室と資料展示ホールを開設し、会下山遺跡の出土品を展示・保管する（10月）
- 昭和39年 発掘調査報告書『会下山遺跡』を刊行（3月31日）
- 昭和48年 第6次調査を実施（7月1日～7月6日、10月1日）
- 昭和51年 芦屋ライオンズクラブが清掃奉仕活動を開始
- 昭和56年 復元竪穴住居が焼失し、検証発掘（12月15日）
- 昭和63年 復元高床倉庫の建て替え、解説板などの新設、遊歩道の再整備
- 平成14年 第7次調査を兵庫県教育委員会が実施（7月1日～7月3日）
- 平成19年 青銅製漢式三翼鏃を市指定文化財に指定する（3月2日）
- 平成20年 第8次調査を実施（3月3日～3月21日）
- 平成21年 第9次調査（2月9日～3月4日）、第10次調査（8月31日～12月16日）を実施
地形測量を開始（8月31日～、平成23年度まで実施）
第10次調査の現地見学会を開催（10月31日）
- 平成23年 国指定史跡に指定（2月7日）



昭和 30 年代の発掘調査



復元竪穴住居（昭和 56 年に焼失）



清掃奉仕活動後の学習会



第10次調査の現地見学会



市内小学校の校外学習

アクセス

阪急芦屋川駅から北西方向に徒歩20分のところに会下山遺跡入り口（芦屋市聖苑入り口のすぐ東側。下の写真参照）。入り口から登山道を徒歩約8分で会下山遺跡に到着します。

国指定史跡 えげのやま いせき 会下山遺跡

約2000年前の弥生時代の高地性集落跡です。
遺跡は会下山全体に広がっており、竪穴住居跡や祭場跡、火たき場跡、堀跡、墓跡などが発掘されています。
標高約200mの山頂付近にあるS祭場跡は眺望が大変良く、遠くの地域まで見渡すことができます。
平成23年2月7日 指定



会下山遺跡の入り口



会下山遺跡までの登山道

編集
発行

芦屋市教育委員会社会教育部生涯学習課

〒659-8501 兵庫県芦屋市精道町7-6 電話 0797-38-2115 FAX 0797-38-2072

平成24年3月31日 第1刷発行
平成26年3月31日 第2刷発行
平成29年3月31日 第3刷発行